

フランツ・カフカの『審判』について

— „Schrift“ を中心に —

筒井英恵

はじめに

フランツ・カフカ (Franz Kafka, 1883-1924) は、作家を本業とすることはなく、大学では法学を学び、法律家としてプラハの「労働者傷害保険協会」に勤めていたため、彼の作品には「法」を主題としたものが多くあり、カフカの作品における「法」の問題を明らかにすることは大変重要である。この「法」を最も明確な形で扱っており、カフカの代表作とも言える『審判 (Der Proceß)』を本論文では中心に扱う。カフカにとって「法」とはどのような意味を持っていたのだろうか。「法 (Gesetz)」とは、文書に書かれた「成文法」、「法律」と文書には書かれていない「不文法」、「掟」とがある。『審判』の中では「法律書」は「文書 (Schriften)」として描かれている。この „Schrift“ というモチーフとカフカの「法」との関係を明らかにすることをここでは試みる。また、 „Schrift“ は「法」との関係だけでなく、作家であったカフカにとって「書くこと」とも緊密に結びついている。カフカは婚約者のフェリス・パウアーに対して「私は文学的な関心を持っているのではなく、文学から成り立っているのです」¹⁾とっており、カフカにとって「書くこと (schreiben)」とは生命そのものであった。

これから「法」、そして「書くこと」という二つの面からカフカの『審判』における „Schrift“ というモチーフを、主にその他の作品との関連や日記、『父への手紙』などの伝記的事実を基にして考えていく。

1. ヨーゼフ・K. の罪と „Schrift“

ヨーゼフ・K. は冒頭文ですでに明らかにされているように、ある朝突然全く身に覚えがないにも拘らず、逮捕されてしまう。この「突然の逮捕」は、『変身』ではグレーゴールがある朝突然、虫に変身してしまった

のと同じように、「カフカのショック」²⁾とも呼ばれるカフカに特徴的な物語の始まり方である。身に覚えのない罪というこの小説全体を謎に包み込んでいる主要な問題は、アダムから全ての人間に生得的に与えられている「原罪(Erbsünde)」という罪をヨーゼフ・K.の罪に当てはめて考えることが、まずはできるように思われる。確かに、K.が朝食に食べているものはりんごであることから、K.の罪を「原罪」に結びつけて考えたくなる要素はある。しかし、原罪では全ての人間に例外なく罪があるはずであるが、小説『審判』の世界では全ての登場人物が逮捕されているわけではないことから、ヨーゼフ・K.の罪を「原罪」として捉えることはできない。では、ヨーゼフ・K.を逮捕させた罪とはなにか。主人公であるヨーゼフ・K.自身はというと、冒頭文の「悪い事をした覚えがない」³⁾と、自分の無実を主張し続ける。しかし、作者のカフカは「K.には罪がある(der Schuldige)」⁴⁾と、1915年9月30日の日記に記している。このカフカの記述に従うと、K.には罪があるということになる。

また、逆説的に語られる「裁判所が罪を見つけるのではなく、罪の方が裁判所を引きつけるのだ」⁵⁾というように、K.自身が訴訟を引き起こした張本人ということになっている。K.は自分で自分を逮捕させたのだろうか。確かに、ヨーゼフ・K.を逮捕しに来た男たちは突然K.の部屋にやってきたわけではない。ヨーゼフ・K.自身が呼び鈴で呼び出したのである。逮捕の朝、K.はいつも時間通りに運んでこられる朝食が来ないので、空腹を感じたために呼び鈴を鳴らしている。そして、鳴らした直後にやって来たのは、朝食ではなく、役所から彼を逮捕しにやって来た者たちだったのである。彼らは「ベルを鳴らしましたね？」⁶⁾と言いながら、K.の部屋に入ってくる。さらにここで重要になるのは、K.を逮捕しに来た人物の名前である。『審判』の主人公のK.という名前の由来は、様々な可能性が考えられてきた。最近では、K.という頭文字は誤って、他人の罪を言い立てた、ローマ法でいう中傷者、誣告者という意味の „kalumniator“ の頭文字であると、アガンベンによって主張されている。法学を学んでいたカフカは、ローマ法を学んでおり、その言葉を知っていたらろうと言うのである。そして、冒頭の「誰かがヨーゼフ・K.を中傷したに違いなかった。」の「誰か」とは、ヨーゼフ・K.自身であると言う。⁷⁾また、カフカは自分の作品の登場人物に、自らの名前を暗示させる名前を与えることが

多く、一般に K. という名前はカフカの頭文字だと考えられている。そのカフカ自身の名前を思い起こさせる K. をカフカの „Vorname“ である「フランツ」という男に逮捕させているのである。これについて、マーク・アンダーソンは、「ヨーゼフ・K. (あるいはカフカ) は偏執的存在、みずからをフランツという分身に逮捕させる、自我の分裂したマゾヒストである。」⁸⁾ と言っている。また、エリアス・カネッティはフェリスとの婚約破棄のための話し合いが、カフカにとって「もう一つの審判」であり、『審判』とカフカの伝記的な出来事に関連づけて解釈している。⁹⁾ ヨーゼフ・K. は自分の無罪を主張し続けながら、所々で、自分には実は罪があるかもしれないという、自責の念に駆られていると思われるような箇所がいくつか見られる。冒頭の「誰かがヨーゼフ・K. を中傷したに違いなかった。というのは、悪い事をしたわけでもないのに、彼はある朝逮捕されたからである。」という文も、„hätte“ と、接続法を用いることで、K. 自身に罪がないかどうかは不確かなこととされているのである。¹⁰⁾ K. の「罪」についてはこれまで様々解釈が行われてきた。エムリヒなどの「彼が自分を無実だとみなしていることのうちにこそある」という解釈や、「自分には罪がないと主張すること」、また、銀行の業務主任として働く K. は「現代社会のブルジョワ階級の代表」であり、そこに「罪」があるなどといった解釈である。¹¹⁾ また、K. の女性に対する態度に「罪」があるとするものや、未完の断片で本文には収録されていない『母の元へ』という章で描かれているように、K. は自分の誕生日には必ず母の元を訪れる約束をしていたが、もう二度もその約束を破っていることから、K. は家族に対して「罪」があるとも言われてきた。¹²⁾ この様々な議論を呼んでいるヨーゼフ・K. の「罪」と „Schrift“ との関連について、ここでは考える。作者であるカフカの日記の記述に従うと、「K. には罪がある」とされている。他にもカフカは K. の罪の可能性として考えられる記述を残している。カフカは 1914 年 7 月 29 日の日記に『審判』を先取りする形でヨーゼフ・K. という名前をすでに登場させている。日記には次のようにヨーゼフ・K. は描かれている。

ヨーゼフ・K.、ある裕福な商人の息子は、ある晩に父親と激しい争いをした後—父親は彼のだらしない生活ぶりを責め立て、そして、それを即座に止めよと要求した。—はっきりとした意図はなく、ただ全くの不安と疲

労感で、港の近くに立つ四方が開けている商館の中へ入った。門番が深くお辞儀をした。ヨーゼフは門番に挨拶をせずに、ちらりと見た。「この無言で下の身分の人間は、あてにされることは全てやるんだ」と彼は考えた。「もし、彼は私をわきまえない目つきで観察している、そう私が考えると、彼は本当にそうするのだ。」そして、彼はもう一度、挨拶をせずに門番の方を向き直った。すると、門番は通りの方を向いて、雲が立ち籠める空を見上げた。¹³⁾

日記に登場するヨーゼフ・K. は彼の父親にその生活ぶりを咎められ、家を追い立てられている。『審判』のヨーゼフ・K. も父親によってその罪を咎められ、逮捕されたのだろうか。

『審判』の中では父親の姿はない。その代わりに、K. の叔父が、K. の「後継人」として登場している。また、カフカ自身、自分の父親との関係に悩んでいたことは、『父への手紙』でよく知られている。

『父への手紙』でカフカは自分の父親を常に恐れており、父の存在自体が子供の自分にとって脅威であり、「最高審級機関 (die letzte Instanz)」だったと言っている。

他に、このK. の「罪」の謎に対して、『審判』本文でも、冒頭の場面で、監視人フランツも一つの回答を与えてくれているように思われる。フランツは、先に引用した「裁判所が罪を見つけるのではなく、罪の方が裁判所を引きつけるのだ」という法律の常識を理解することが出来ず、「そのような法律を私は知りませんね」¹⁴⁾と言うK. に次のように答える。

「見ろよ、ヴィレム。彼は法律を知らないと言状し、そして、同時に無罪だって主張しているよ。」¹⁵⁾

このフランツの言葉から明らかにされるのは、法律を知らないということと同時に「罪」であるという解釈もできる。ところで、『審判』の中でいわば「作中小説」¹⁶⁾として語られる『掟の門の前』の主人公、田舎の男もK. と同様に法律を知らない者として描かれている。寓話『掟の門の前』は1915年に独立した物語として雑誌に発表され、最終的には1920年に短編集『田舎医者』の中に収められることになった物語であるが、この寓話

に登場する「田舎の男」は多くの面でヨーゼフ・K.自身と類似性を示している。もっとも、この「田舎の男」という主人公の名前はK.のように「法律を知らない者」という意味を込めてカフカが付けていると指摘されている。例えばハルトムート・ビンダーは「田舎 (Land)」という言葉はヘブライ語の表現である „Am-ha'aretz“ から来ているという。このヘブライ語の表現は『旧約聖書』の中で、伝統的に思考し、教育を受けていないユダヤ王国の田舎の住民を、イェルサレムの都市の住民と対照的に表現したもので、ルターのドイツ語訳では „Volk im Lande“ とされているという。また、このヘブライ語の表現はカフカの日記の中にも登場することから、カフカがこの表現を知っていたことは証明されている。¹⁷⁾

タルムードから：学者が嫁探しをするなら、学者は一人の „amhorez“ を一緒に連れて行くべきだ。なぜならば、学者はあまりにも自分の学識のあることに浸りきり、必要なことに気づかないだろうからだ。¹⁸⁾

伝記的事実から明らかにされているように、カフカは1911年の終わりにプラハにやって来たイデッシュ語劇を観たことをきっかけに、ユダヤ的なものへの関心が高まったのだが、『審判』の成立年はカフカが関心を持ってユダヤ教に取り組んでいた時期と重なっている。

カフカはラビでありタルムード学者を母方の祖父に持っており、¹⁹⁾父方の祖父もユダヤの掟に従って屠殺した肉をユダヤ人に売る肉屋を営んでいた。しかし、1848年のユダヤ人居住法の廃止に伴って、大量のユダヤ人たちが田舎から都市に出てくることになるが、カフカの先祖もこれらの都会に出てきたユダヤ人の集団のうちの一人だった。²⁰⁾都市に出てきたこれらのユダヤ人たちは、ユダヤ民族としての伝統を維持せずに、キリスト教文化に同化してしまう者たちが多かった。カフカの父に関しても、カフカは『父への手紙』の中で、ユダヤ教の信仰を子供にまで伝えるには「少なすぎて」、子供につたえている間に「すっかり滴り落ちてしまっていた」²¹⁾と言っている。

あなたは、小さなゲットーのような村から実際にいくらかユダヤ教を持って来ていましたが、それは多くはなく、そしていくらか都市で、そし

て更にいくらか軍隊の時に失われました。²²⁾

カフカは自分がユダヤ民族という共同体に属することが出来ず、また、多民族国家であるオーストリア＝ハンガリー帝国領だったプラハという都市の中でチェコ人でもユダヤ人でも、またドイツ人でもないということを嘆いている。このような葛藤を抱えていたカフカにとって、この1911年のイデッシュ語劇との出会いは非常に意味のある出来事であった。その後、彼の中でユダヤ教についての関心が高まるのだが、エルンスト・パーヴェルは「カフカの伝記」の中で、このユダヤ教への関心は、「信仰ではなく、彼自身をも包み込んでくれる生々とした共同体への憧憬であった」²³⁾と指摘している。

このようなカフカはユダヤ民族の伝統を学ぶことに熱心に取り組んでいたという事実から、『掟の門の前』の「田舎の男」の「田舎(Land)」とは、ヘブライ語の表現である „Am-ha'aretz“ から来ていると考えられ、その意味は「掟、法律を知らない者」のことであり、また、その姿はヨーゼフ・K. と重なっている。

2. „Schrift“ の研究

それでは、ヨーゼフ・K. や田舎の男は法律を知らないために罰せられているのだろうか。しかし、「法律」、「掟」を知らない者は彼らだけではない。K. に法律というものはどういうものを説く「裁判所に属する」と自称する者たちも例外なく、„Gesetz“ を知らない者たちだ。物語『審判』に登場する、「裁判所に属する」と言う者たち、K. に教えを説く監視人たちをはじめ、K. の裁判の弁護を引き受ける弁護士のフルト、裁判所専属の画家のティトレリ、刑務所の教誨師、そして『掟の門の前』に立つ門番。彼らは例外なく実際には「法律」を知らない者たちであることが描かれている。例の「裁判所は罪の方に引きつけられるのだ」と言う役所から送られてきた監視人たちにK. は「その法律はおそらく、あなた方の頭の中にだけあるんですよ。」²⁴⁾ と言い、監視人たちが持っている法律の知識に疑念を持つ。また、先祖代々、裁判官の肖像画を描く裁判所専属画家であるティトレリも同じく、「法律にはですね、法律を私は読んだことはないのですが」²⁵⁾ と、K. に打ち明けている。掟の門を守る門番も実は「彼は法

の内部を知らず、そうではなくて、ただ道を知っていただけなのだ」²⁶⁾とも言われている。彼らは裁判所に属しながら、なぜ、法律を知らないのだろうか。それは、法律に書かれている文書を読むことが出来ないからではないだろうか。

ところで、彼らが使用している法律書を K. は実際に何度か目にしている。初めは、K. の最初の審理が開かれた時であり、K. は予審判事が何か「学校のノートのような古い、たくさんページを捲ったせいで、完全に型崩れしている」²⁷⁾ ノートを持っているのを目にする。そこに自分の審理のことが書かれていると思った K. は予審判事からそのノートを奪い、中身を見ることに成功する。しかし、そのノートを目にした K. は「自分には近づきにくいもの」²⁸⁾と感じている。次に K. が法律書を目にしたのは裁判所事務局であった。裁判所事務局に置いてあった法律書も、最初に K. が見た予審判事のノートと同様に非常に使い古され、汚れている。

どれも古びて擦り切れた本で、表紙は真ん中でほとんど破れていて、部分部分がただ紐でどうにか繋がっていた。²⁹⁾

法律書はどれも、これまでにたくさんの人が「たくさんページを捲って」読んできたために、非常に「古く」、「汚れている」。この法律書が「古い」ことが強調されていることは重要であるように思われる。なぜこんなにも法律書の「古さ」をカフカは強調して書いているのだろうか。

ドイツ語の „Gesetz“ には、「法律」という意味と「掟」と、広い意味を持っている。また、ユダヤ教において「法律」というものの起源に遡ると、「法」とはもともと神の言葉を書き記したもので、例えば、神の啓示を受け、それを書き記した「モーセ五書」などがある。これはユダヤ教の「トーラ」のことであり、もともと「トーラ」とは「神の教え」を意味し、それがギリシャ語で「法」を意味する「ノモス」と訳されたために、「律法」と呼ばれている。つまり、„Gesetz“ とは神の「掟」を人間が書き記した「書かれた文書 (geschriebene Schrift)」なのである。聖書もドイツ語では „Heilige Schrift“ と呼び、文字どおり神の言葉を成文化した「聖なる文書」を意味する。カフカにとって „Gesetz“ とは、このような、人間に「掟」を与えた存在として、神の存在がある。しかし、同時に、現実の世界では

『父への手紙』に「肘掛け椅子に座って、世界を支配している」³⁰⁾とあるように、父がカフカの世界を支配している。父はカフカにしてみれば「私にとってとても途方もない基準となる人間」³¹⁾であり、このような絶対的な存在である父の命令に従って生きてきたカフカは、「ただ私のためだけに作り出された掟」³²⁾があると感じて生きてきたと言っている。父はカフカにとって、世界の支配者であり、掟の制定者であり、「最高審級機関 (die letzte Instanz)」なのである。つまり、カフカにとって „Schrift“ は父であり、また神のような超越的存在であると言えるだろう。しかし、『審判』の世界でこの神や父のような超越的存在は「上級裁判所」に K. が最終的に行き着くことができなかつたように、はっきりと姿を現わすことはない。この超越者的存在は「目に見えない寓意的超越者 (アテオス・アプスコンディトゥス)」³³⁾であると言われている。また、同じく「裁き」を扱った作品であることで『審判』と対応していると言えるカフカの初期の作品『判決』でも多くの „Schrift“ のモチーフが登場する。『判決』は『審判』と同じようにはっきりとした「罪」がないがある日突然、結婚を控えた息子、ゲオルク・ベンデマンが父親に「悪魔のような人間だ」³⁴⁾と言われ、溺死の刑を言い渡される物語である。『判決』では友人に宛てられた「手紙」、つまり、 „Schrift“ が父と息子のどちらが書いたものが正しいのかをめぐって争われている。父は息子が書いた手紙と自分の手紙を比べて、この友人が「お前の手紙には眼もくれずに、くしゃくしゃに丸めて左手に持ち、右手には私の手紙を読むために広げて持っているんだ！」³⁵⁾と言いつつ。この父の言葉には絵画においても正しいものは右に描かれ、正しくない者は左に描かれるというような西洋の伝統が現れていると考えられる。父親の手紙の方が正しい方の右手に持たれているのだ。しかし、ここで注目したいのは、その父が息子に溺死の判決を下す際に手に持っている新聞である。ここで描かれている新聞も書かれたもの „Schrift“ のモチーフだと考えられる。そして、ここでも „Schrift“ である新聞は『審判』の法律書と同じように「古い」と言われているのである。父の持っている新聞を見たゲオルクはその「古さ」に気づき、自分が今までに見たこともない新聞だと考える。

一枚の古新聞を、父はベッドから放り出した。古い、ゲオルクは名前を聞いたこともない新聞だった。³⁶⁾

父の持っている新聞も法律書も古くてもう読めない。ここで示されているのは、父なる神の言葉を書き記した „Schrift“ である「法」というものがもう現在では読めなくなったということと思われる。法律書は古くなったために、裁判所に勤めている者でさえもう読めないのだ。さらに、彼らが法律書を読むことが出来なくなった理由は古くなった以外にもある。実際にそこに使用されている言語にも彼らが法律書を読めない理由がある。ヨーゼフ・K. の弁護を担当する弁護士フルトは K. に他の被告の参考だと言い、彼の依頼人の一人を紹介する。弁護士が紹介した依頼人の商人ブロックは気が向いた時にだけ面会をする弁護士のために、弁護士の家に住み着いているのだが、ブロックは1日の大半をまるで棺桶のような狭い部屋で、裁判書の書類を跪いてただ見つめている。ブロックはこの「書類(Schriften)」を読んでいるのではなく、ただ一日中同じページを見つめているだけなのである。なぜブロックは „Schriften“ を見つめているだけなのか。それは、そこに書かれている言葉が「多くのラテン語」で成っており、「理解出来ないから」である。

それは確かに学者ふうのものでしたが、しかし、実際には中身がありませんでした。とりわけ、私には理解の出来ない、非常に多くのラテン語で書かれていました […] ³⁷⁾

リッチィ・ロバートソンは、ブロックの読んでいる書類が „Schriften“ とあることは「聖書(Heilige Schrift)」を暗示していると指摘している。また、エリック・マルソンはブロックのこの努力は祈りと告解のパロディ化であるとも言っているという。³⁸⁾ これまで見てきたように、法律書はたくさんの人によって読まれてきたために汚れて古く、またそこに使用されている言語も古く、もう死語であるラテン語で書かれているためにいくら彼らが読もうと努力しても読めないのである。しかし、彼らは読めない言葉で書かれている法律書を読もうとする努力をやめようとはしていない。法律書がこのように汚れている原因はそこに書かれている言葉を読もうと努力する彼らにある。彼らが „Schrift“ を「たくさん捲って」研究することで „Schrift“ はますます汚れていく。しかし、「大聖堂にて」の章で司祭が K. に語るように、彼らの研究によって得られる „Schrift“ に対する見解は「た

だ絶望の表現」に過ぎない。

„Schrift“ は不変のものであって、意見はしばしばそれに対する絶望の表現でしかない。³⁹⁾

K. の担当弁護士、フルトも司祭と同様に、裁判の手続きに様々な見解が山積することで、かえって見通しが利かなくなっているのだと言っている。

いったい私が何を言ったと言うんだ？私はある裁判官の意見をそのまま伝えたんだよ。君も知っているように、様々な見解が手続きの周りに山積して、見通しが利かなくなっているんだよ。[...] 見解の相違、それ以上のものではないんだ。⁴⁰⁾

『審判』の中には至る所で屈み込んで „Schriften“ を研究している人たちが描かれている。彼らは読むことの出来ない、また、「中身の無い (inhaltslos)」法律書を必死で「研究 (studieren)」している。このカフカにおける „Schrift“ とそれを解説しようとする学生に関して、ベンヤミンは「カフカの学生たちは „Schrift“ がなくなった学徒である」⁴¹⁾ と述べている。また、このカフカの学生についての見解をめぐってショーレムとベンヤミンは手紙で議論をしている。ショーレムによると、カフカの学生は「„Schrift“ がなくなってしまった学徒ではなく、 „Schrift“ の謎解きをすることが出来ない学徒」⁴²⁾ であるが、それに対してベンヤミンは「„Schrift“ が学徒たちからなくなってしまったのか、または、 „Schrift“ を学徒が謎解き出来ないかは同じである。なぜなら、 „Schrift“ は „Schrift“ に属している鍵なしではまったく „Schrift“ ではなく、生, „Leben“ である。」⁴³⁾ と、カフカの „Schrift“ とそれを学ぶ学生についての意見が交わされている。

カフカの描く学生は「鍵を失っている」ために神の言葉が書かれた „Schrift“ をもう読むことが出来ない。また、 „Schrift“ を研究することは「絶望の表現でしかなく」、「かえって見通しが利かなく」なるという。しかし、そこに書かれた神の言葉を読もうとする彼らの努力は続いている。カフカは『父への手紙』の中で、ユダヤ教の戒律の資格が与えられる「バルミツ

バ」という宗教儀式について述べているが、その儀式のために要求されるトーラの勉強が「ただこっけいな暗記を要求したこっけいな試験の結果に至るだけだ」⁴⁴⁾と言っている。„Schrift“はもう古くなっており、また、中身がないので、それを学ぶ人間の姿はただ「こっけい」なだけである。K.の逮捕をK.の部屋の家主であるグルッパツハ夫人は「何か学問的」⁴⁵⁾だと思っている。これは„Gesetz“がただ「こっけいな暗記だけの試験」となってしまったことを表しているだろう。それに対して、K.はカフカが「バルミツバ」に対して感じたように、「単純に何か学問的だと思うことすらせず、そうではなく、そもそも無意味なことだと思う」⁴⁶⁾のである。カフカはヨーゼフ・K.にこの„Schrift“の研究が「無意味なこと」だと言わせることで彼らを批判している。カフカは短編『掟の問題』の中で、自分たちの知らない掟によって支配されている人々を描いている。ここでも「掟は古い」⁴⁷⁾と描かれている。そして、この古い、自分たちの知らない掟で支配されていることは「非常に苦痛だ」⁴⁸⁾と民衆は感じている。

3. „Schrift“と罰

彼らがいくら父なる神の„Schrift“を知らないからと言って、„Schrift“は無効にはなっていない。『掟の問題』の自分たちの知らない掟で支配されている民衆のように、ヨーゼフ・K.も最後には裁きを受ける。ところで、この『審判』の執筆に行き詰まったカフカは『流刑地にて』を書いた。物語『流刑地にて』は「製図家」、「馬鋏」、「寝台」という三つの部分からできた「独特の機械」によって、囚人自身は知らない判決内容を囚人の肉体に„Schrift“として書き込むことで、囚人に肉体を通して判決文を理解させるという奇妙な裁判制度を有するある熱帯の島が舞台である。判決文は「ただ迷宮のようで、互いに何十にも交差する線で、その線は非常に密に紙を覆っているので、白い紙の隙間を識別するのにも苦勞する」⁴⁹⁾し、「非常に技巧を凝らしたもの」⁵⁰⁾であるために、「解説出来ない」⁵¹⁾もので、ここでも読むことの出来ない„Schrift“が主題となっている。カフカは実現することはなかったが、この『流刑地にて』の物語を『判決』、『変身』と合わせて『罰』というタイトルで出版しようとしていた。⁵²⁾したがって、『流刑地にて』が『審判』の執筆を中断して書かれたことと、『罰』というタイトルでまとまった形で出版しようとしていた意

志があったという事実を考えると、『流刑地にて』はヨーゼフ・K.の罪に対する「罰」を考える上で重要なテキストであると言えるだろう。『流刑地にて』でも『審判』や『錠の問題』のように、今ではもう読めなくなった „Schrift“ によって支配されている社会が描かれている。『流刑地にて』では、その読めない „Schrift“ を囚人は「罰」として肉体に「傷として書き込まれ wundbeschrieben」⁵³⁾ることによって「„Schrift“ を自分の傷でもって解説する」⁵⁴⁾という。そして、この „Schrift“ を体に「傷として書き込まれて」いるうちに「悟性が最もまぬけな者にも生じる」⁵⁵⁾という。しかし、この処罰が有効なものとして機能していたのは昔のことであり、今の流刑地ではもうこの処刑機械を用いての刑の執行は廃れてしまい、メンテナンスをされなくなった機械は壊れかけている。そしてついに物語の最後にこの „Schrift“ を囚人の肉体に刻み込む機械は故障し、完全に壊れてしまう。判決文を書きつけるはずの馬鋏は故障し、肉体を「ただ突き刺している」⁵⁶⁾だけで、「約束された救済の印は発見できない」⁵⁷⁾ままで「それは直接の殺人」⁵⁸⁾となってしまう。カフカの世界では流刑地の処刑機械を発明した前司令官が死んでいるように „Gesetz“ を制定した神は既に死んでいる。ただその „Schrift“ を解説しようとしている人間たちだけが残されており、『流刑地にて』でも „Schrift“ を読めない人間たちは「„Schrift“ の中を長い時間をかけて、良く読み取らなくてはならない」⁵⁹⁾とされている。

4. カフカの „Schrift“

この『流刑地にて』の囚人の肉体に „Schrift“ が書き込まれることで『ヨハネの福音書』の「言葉は肉となった」という言葉が思い起こされると指摘されている。⁶⁰⁾ 聖書では『創世記』に「神は言われた。「光あれ。」こうして光があった」⁶¹⁾というように、世界は神の言葉によって創造されたものであり、言葉には物を生成するほどの強い力があるという。しかし、バベルの塔の建設に対する神の罰として言語混乱に陥った後の人間は「アダムの言語」を失い、神の言葉を直接聞くことはできなくなった。この神の言葉を失った人間は神が事物に与えた本当の名前がわからなくなった。そして、事物を言葉で捉えることが出来なくなった人間にとって言語によって表現することが困難であるという問題は西洋文化で常に問題とされてきた。特に20世紀のヨーロッパではホフマンスタールの『チャンドス卿の

手紙」の「言葉が、腐れ茸のように口のなかで崩れてしまう」⁶²⁾に象徴的に現れているように「言語危機」というものが襲うことになる。カフカもまたこの「言語危機」に直面していた。

また、カフカは彼にとっては母語であるドイツ語で詩作することの困難さも感じていた。チェコ人が大多数を占める当時のプラハの都市において、ドイツ語話者割合は低く、1900年には45万の住人中ドイツ語を話すのはわずか3万4千人だった。⁶³⁾また、このプラハの複雑な言語環境から、方言のないプラハのドイツ語は貧しい、「紙のドイツ語」だとも言われていた。⁶⁴⁾カフカはプロートへの手紙において、書くことの四つの不可能性を挙げて次のように述べている。

[...]書かないことの不可能性、ドイツ語で書くことの不可能性、他のように書くことの不可能性、ほとんど第4の不可能性をつけ加えることができるかもしれませんが。書くことの不可能性です。つまりそれはあらゆる面から不可能な文学でありました。ドイツ人の子どもを揺りかごから盗んで来てそして大急ぎでなんとかして仕上げたジブシー文学でありました。⁶⁵⁾

カフカにとって、自分が用いる言語すら自分の所有するものではなく、「盗んで」きたものなのだ。また、言語というものは文法という規則に規定されたものであると同時に慣習的なものである。

カフカが17歳の時から愛読していたニーチェ⁶⁶⁾も、「言語の立法が真理に最初の法則を与える」⁶⁷⁾と言っている。カフカは、「鳥かごが鳥を探しに行った (Ein Käfig ging einen Vogelsuchen)」⁶⁸⁾というアフォリズムを書きのこしているが、カフカの動物モチーフを解説したフィンガーフトは、「カフカ」という名前はチェコ語で「カラス」であることや、詩人だと自身のことを認識していたニーチェも「鳥」というものを詩人の形象として用いていたことから、「鳥」という動物モチーフは詩人としてのカフカの姿であると指摘している。⁶⁹⁾このフィンガーフトの指摘から、このアフォリズムは、言語を用いる詩人はいつも「言語の立法」、つまり、文法という „Käfig“ に捕らわれながら詩作することを強いられているようカフカは常に意識していたと考えられないだろうか。

初期作品の『祈る人との対話』では教会で大げさに祈り、人々の注目を

集めている「祈る男」が登場するが、彼は今では観念でしか捉えることの出来なくなった事物の本当の名前を知りたいと嘆いている。

私は自分自身で、自分の人生に納得した時が一度もなかったのです。私はつまり、私の周りの事物を非常に弱々しい観念の中でしか把握しておらず、そのことは、私がいつも事物たちがかつて生きていたでしょうが、しかし、今はそれらの事物は沈んでしまうだろう、と私が思うことなのです。いつも、皆さん、事物たちが私に見せる以前に呈していただろうようなかたちで事物たちを見たいという、非常に苦しい欲求が私にはあるのです。⁷⁰⁾

彼が人々の注意を惹かずにはいられない理由はこのことにあると言う。つまり、「祈る男」は人々の視線を集めることによって、自分の身体というものを維持している。カフカ文学は「世界のまなざしによって「わたし」が漠然と構成される」、「受動的コギト」だと指摘されている。⁷¹⁾ところで、常に銀行での出世を夢見て、他人の評価を気にして生きている K. の姿は、この「祈る男」と重なっている。

『祈る男との対話』でも事物の本当の名前がわからなくなった「言語危機」に襲われた人間が「物の本当の姿」を見たいという、言語と認識の問題が問われている。

しかし近代とは、ニーチェが「神は死んだ」世界だと言うように、神の言葉を失っただけでなく、神すらも失った世界である。『審判』でもいたるところで神がいなくなった世界というものが描かれている。『審判』の世界ではいつも光のない「どんよりと曇った空」に覆われており、教会には全く人がおらず、「からっぽ」⁷²⁾である。このような、近代の「神の死」という形而上学に対する信頼の喪失は、つまりは「言語の意味内容」である「シニフィエ」の不在である。⁷³⁾『掟の門』の伝説を語る司祭は、K. に自分はこの話を „im Wortlaut der Schrift“ に語っただけだと言っているが、このことはつまり、„Schrift“ の「シニフィエ」ではなく、その「音声 (laut)」という、「シニフィアン」だけを伝えたということだと思われる。ところで、K. の逮捕は口頭で逮捕されたことが伝えられるだけで、逮捕状という「書類 (Schrift)」を見せられることはない。K. 自身も自分の「身分証明書 (Legitimationspapiere)」という „Schrift“ としての自己の証明を探しても

見つからない。ヒーベルもまた、K.のこの逮捕を「ただ、発話行為によって成立している」と指摘しており、そのことは、「シニフィエを与えることのないシニフィアン」であると言っている。⁷⁴⁾「最初の審理」で予審判事は審理の本を見ながら、銀行員であるK.に向かって、「あなたは、室内画家だったね」⁷⁵⁾と尋ねており、「Schrift」とK.の実際の生は一致していない。

5. カフカの身振りの言語

また、カフカの世界には「前言語的なもの」として、「身振り」がよく使われていると言う。ベンヤミンは「カフカの全作品は身振りの法典を表している」⁷⁶⁾、「身振りからカフカの詩作品は生まれる」⁷⁷⁾と言い、カフカの身振りについて重要な指摘をしているが、また、アドルノもカフカの作品における「身振り」に注目し、次のように言っている。

しばしば、身振りが言葉に対する対極に置かれている。つまり、前言語的なもの、様々な意図から逃れてしまったものが、カフカの場合、病気のように、カフカにおけるあらゆる意味を侵食してしまった多義性と真っ向からぶつかっている。⁷⁸⁾

アドルノの指摘するように、カフカはバベルの塔の建設によって引き起こされた言語の混乱によって生じた言葉の「多義性」に対抗するために、「前言語的」な「身振り」を用いている。この「身振り」というものは、カフカにとって「シニフィエ」と「シニフィアン」の区別なき、表現方法だったのではないだろうか。また、この「身振り」という新しい表現方法をカフカが用いるようになったのにも、1911年のイディッシュ語劇との出会いが大きく関係している。⁷⁹⁾『審判』の世界では実際に、たくさんの「身振り」が描かれている。中でも、『審判』の最後の場面の「犬のようだ!」と彼は言った、「恥辱が生き残っていくようだった」の「恥辱(Scham)」をベンヤミンは「カフカの最も強い身振りである」と言っている。この最後の場面が意味することは何であろうか。恥辱を感じるということは、誰かが自分を見ていることを見るという、「超自我(Über-Ich)」の働きによって感じる感情である。先に述べたように、冒頭の場面で、K.が罪を犯して

いないと主張する箇所が „hätte“ と、接続法で書かれていることによって、曖昧にされているが、しかし、K. の分身とも言えるフランツによって K. は逮捕される。つまり、K. の逮捕は自己懲罰的に、見張りのフランツに表されている超自我によって行われていると考えることができる。ツィーマンは、「自己批判は „Scham“ として現れ、他人の批判は „Schuld“ として現れる」⁸⁰⁾ と言っているが、K. は超自我の働きを通して、自分の罪を認識したと言えるだろう。

また、処刑の場面で見せる K. の「彼は両手を挙げ、全部の指を広げた。」⁸¹⁾ というもう一つの「身振り」は両手を上に上げて祈る「オランス」という祈りの形式と考えられないだろうか。

6. カフカの „Schrift“ の使命

ベーダ・アレマンは、この『審判』最後の場面を、「他人の助力をあてにするむなしい希望の最終的な破局のみを語るに過ぎない」⁸²⁾ と言っている。K. は、この一年間の訴訟を、様々な人の助けを借りながら、乗り切ろうとしている。司祭にも、「君はあまりにも他人の助けを求めすぎる。」⁸³⁾ と言われているが、K. は死に際にメシアによる救済を求めたのだろうか。カフカの『審判』世界の „Schrift“ について論じたものの中で、フランク・シルマッハーは次のように言っている。

しかし、メシアが現れない限り、全ての生命はすでに書かれたもの、また、すでに起きたものの拘束のもとにとどまらなければならない。つまり、歴史以前の有罪判決に、掟に、そして、その解釈のもとに。⁸⁴⁾

メシアが訪れない限り、つまり、人間に「最後の審判」の時が訪れない限り、すでに書かれた „Schrift“ にとどまっていなければならない。それは審判の延期に他ならない。K. に無罪を勝ち取るために助言をする裁判所専属の画家ティトレリは K. に三つの解放の可能性があると助言する。このティトレリの提示する解放の可能性の中に「訴訟の引き延ばし」⁸⁵⁾ というものがあるが、K. はこのティトレリの提案を「本当の無罪判決を妨げてしまう」⁸⁶⁾ と気付いて拒絶する。すると、ティトレリは「あなたは、問題の核心を把握しましたね」⁸⁷⁾ という暗示的な言葉を発している。メシ

アの到来を待つだけでは、訴訟を引き延ばしているだけで、それまでは現行の „Schrift“ にとどまる他はない。

カフカは次のような言葉を残している。

私は、もちろん、キルケゴールのように、キリスト教のすでに重く垂れ下がっている手によって生に導かれはしなかったし、そして、シオニストたちのように、はためているユダヤの祈祷マントの先端にまだ掴まるようなことはしなかった。私は、終わりか、始まりである。⁸⁸⁾

この言葉は、カフカの作品におけるキルケゴールの影響を考える上で重要な記述であると同時に、彼の宗教観を知ることができるものである。特に、最後の「私は、終わりか、始まりである。」という言葉は、『ヨハネの黙示録』のイエスの言葉と同じである。『黙示録』は「最後の審判」を描いたものであるが、その中で、救世主イエスが語る言葉と同じ言葉をカフカはここで使っているのである。このことは、カフカが、自身をメシアの姿と重ねて見ていたと考えることができるように思われる。

また、カフカの日記の「私の頭の中にある途方もない世界。しかし、どのようにして、私を自由に、そして、引き裂くことなく、世界を自由にすることができるだろうか。」⁸⁹⁾ という言葉にはメシア信仰があるとして、ヴァルター・ゾーケルは「そのような使命は、メシアの姿を要求する」⁹⁰⁾ と言っている。カフカは自身の詩作を、メシアのように「途方もない世界」を「自由にする」使命であると考えていたのではないだろうか。

モーリス・ブランショはカフカにとっての「書くこと」とは自分を存在させるためだった、と言っている。さらに、カフカはなぜ「書くのか」と問い、カフカの日記の次の箇所を持ち出している。

僕が「彼は窓から眺めていた」という文を無作為に書くとき、この文はすでに完璧なのだ。(1911年2月19日)。—「彼は窓から眺めていた」となぜ書くのか。それは、この一文がすでに彼自身を超えたものであるからなのだ。⁹¹⁾

このカフカの日記の記述からは作家は言葉を使って神のように物語世界に事物を創造することが可能なのだという考えが見られる。

『ある戦いの記録』の「散歩」という章ではまさに言葉によって既にある世界を創造し直している。

悩みなく私は更に歩いて行った。なぜなら私は徒歩だったので、山の多い道の苦勞を恐れたので、私は道をいっそう平坦になるようにさせ、そして遠くでついには谷間に下るようにさせたからだ。

石たちは私の意志に従って消え去り、そして風は静まり、そして夜の中に消えてなくなった。⁹²⁾

カール・エーリヒ・グレーツィンガーはこの「散歩」の章の語り手の私について、「この語り手は、文字通り、言葉で世界を創造している。」⁹³⁾と述べている。

『ヨハネの福音書』にあるように神の「言葉は肉となる」ことは、『流刑地にて』で描かれていたように、もうありえない。神の言語も神も失ってしまったからである。ヴァルター・ゾーケルは、「言葉が肉体にではなく、肉体が言葉になることをカフカは目指している」⁹⁴⁾と言う。カフカは『創世記』での神の行為と反転して、「シニフィエ」と「シニフィアン」の差異のない「身振り」を用いることで、「肉体が言葉になる」ことを目指していたと言えるだろう。

『判決』で父の „Schrift“ に息子のゲオルクが挑んだように、カフカは自分のメシア的な „Schrift“ で現行の „Schrift“ を止揚することを試みていたと言えるだろう。ブランショは次のように言う。

それどころか我々は、文学が新たなカバラ、すなわち古き時代に端を發し、現代において再創造され、そこから、自分自身を超えて存在し始める新たな秘義へと進化していく姿を夢想することさえできるかもしれない。⁹⁵⁾

終わりに

カフカは初期の作品から晩年の作品まで一貫して、父のような超越者が存在する世界の、失われたがそれでもまだ効力を維持し続けている „Schrift“ に対抗し続けた。『判決』では父の手紙と息子の手紙を対決させ、『審判』ではその父なる存在の „Schrift“ はカフカの世界では「古く」、 「中

身がない」ものとして書き、そして、その父親的存在が残した „Schrift“ をただ学ぶだけの人々を「学生」というような形象として描くことで極めて批判的に描いた。それに対して、この父の „Schrift“ に無知であるヨーゼフ・K. を通して、カフカは最終的にはこの „Schrift“ という「虚偽が世界秩序とされている」⁹⁶⁾と気づかせた。カフカは「書くこと」においても、神の言語だけでなく、神すらも失った世界の中で、いかにして詩作することが可能かという問題を考え続けた。カフカは「言語危機」や神の不在を「身振り言語」を用いるなどして乗り越え、「この途方もない世界」に対抗できる唯一の手段である文学で、この世界を生き抜いた。このカフカの文学の使命は「メシア的」なものでもあった。短編集、『田舎医者』に収められている、『ある夢』に登場するもう一人のヨーゼフ・K. は、墓穴に肉体は埋められながらも、墓石に自分の名前が刻み込まれるのを見て、うっとりとする。⁹⁷⁾ここで「身分証明書」をなくしたK. は „Schrift“ と生が一致するのを夢見たと言えるのではないか。ここで „Schrift“ を刻むのは、カフカのように「芸術家」の仕事である。『流刑地にて』にも、「誰もが、肉体の中で、碑文 (Inscript) が実行されるのを見る」⁹⁸⁾と、肉体と「碑文 (Inscript)」の一体化が夢見られている。

『父への手紙』には、自分が「書くこと」によって「実際に少しばかり自主的に父から離れることができた」⁹⁹⁾とあるように、カフカは「書くこと」で父の „Schrift“ の世界に対抗したのである。

注

- 1) Kafka, Franz: Briefe an Felice Bauer. Hrsg. von Hans-Gerd Koch, Frankfurt am Main 2005. S.479.
- 2) 立花健吾:『断食芸人』—ある作家の宿命—上江憲治・野口広明編『カフカ後期作品論集 同学社 2016. 131 頁。
- 3) Kafka, Franz: Der Proceß. Hrsg. von Jürgen Born, Gerhard Neumann, Malcolm Pasley und Jost Schillemant. Frankfurt am Main 2002. S.7.
- 4) Kafka, Franz: Tagebücher. Hrsg. Jürgen Born, Gerhard Neumann, Malcolm Pasley und Jost Schillemant. Frankfurt am Main 2002. S.757.
- 5) A.a.O., Kafka, Franz: Der Proceß. S.14.
- 6) Ebd., S.7.

- 7) アガンベン, ジョルジョ 岡田温司・栗原俊秀訳: 裸性 平凡社 2012.39-40 頁。
- 8) アンダーソン, マーク 三谷研爾・武林多寿子訳: カフカの衣装 三谷研爾・武林多寿子訳 高科書 1997. 275 頁。
- 9) Vgl. カネッティ, エリアス 小松太郎・竹内豊治訳: もう一つの審判 法政大学出版局 1971.
- 10) Hiebel, Hnas H: Die Zeichen des Gesetzes Recht und Macht bei Franz Kafka. München 1989. S.180.
- 11) エムリヒ, ヴィルヘルム 志波一富・中村詔二郎訳: カフカ論 II 孤独の三部曲 冬樹社 1971. 62 頁。
- 12) Anglet, Kurt: Kafka-Sequenzen zum Prozeß Die Aura vor dem Fall 2006.S.73.
- 13) A.a.O., Tagebücher. Frankfurt am Main 2002.S.666-667.
- 14) A.a.O., Kafka, Franz:Der Proceß. S.14.
- 15) Ebd., S.15.
- 16) クルツ, ゲルハルト 清水健次<他訳>:「書」に関する見解—長編『審判』の伝説「掟の門」の釈義について—カール・E・グレーツィンガー, ステファン・モーゼス, ハンス・D・ツィンマーマン: カフカとユダヤ性 教育開発研究所 1992. 332 頁。
- 17) Binder, Hartmut:>Vor dem Gesetz< Einführung in Kafkas Welt Stuttgart. Weimer 1993. S.38.
- 18) A.a.O., Tagebücher. S.276.
- 19) パーヴェル, エルンスト 伊藤勤訳: フランツ・カフカの生涯 世界書院 1998. 9 頁。
- 20) 同書 8 頁。
- 21) A.a.O., Kafka, Franz:Der „Brief an den Vater“ S.188.
- 22) Ebd., S.188.
- 23) 前掲 パーヴェル, エルンスト フランツ・カフカの生涯 247 頁。
- 24) A.a.O., Kafka, Franz:Der Proceß. S.14.
- 25) Ebd., S.206.
- 26) Ebd., S.298-299.
- 27) Ebd., S.61.
- 28) Ebd., S.63.

- 29) Ebd., S.76.
- 30) A.a.O., Kafka, Franz:Der"Brief an den Vater" S.152.
- 31) Ebd., S.156.
- 32) Ebd., S.156.
- 33) 保坂一夫 : 同時代を生きた人びと—フランツ・カフカとトーマス・マン『同時代』第3次 第28号 2010.136頁。
- 34) Kafka, Franz:Das Urteil In: Drucke zu Lebzeiten. Hrsg. von Jürgen Born, Gerhard Neumann, Malcolm Pasley und Jost Schillement. Frankfurt am Main 2002. S.60.
- 35) Ebd., S.59.
- 36) Ebd., S.60.
- 37) A.a.O., Kafka, Franz:Der Proceß. S.240.
- 38) Robertson, Ritchie: Kafka Judentum Gesellschaft Literatur. Stuttgart 1988. S.156.
- 39) A.a.O., Kafka, Franz:Der Proceß. S.298.
- 40) Ebd., S.268.
- 41) Hrsg. von Schweppenhäuser,Hermann:Benjamin über Kafka Texte, Briefzeugnisse, Aufzeichnungen Frankfurt am Main 1981. S.37.
- 42) Ebd., S.75.
- 43) Ebd., S.78.
- 44) A.a.O., Kafka, Franz:Der "Brief an den Vater" S.187.
- 45) A.a.O., S.Der Proceß. S.33.
- 46) Ebd., S.34.
- 47) Kafka, Franz:Zur Frage der Gesetz In: Nachgelassene Schriften und Fragmente II. Frankfurt am Main 2002. S.270.
- 48) Ebd., S.270.
- 49) Kafka, Franz:In der Strafkolonie In: Drucke zu Lebzeiten Frankfurt am Main 2002. S.217.
- 50) Ebd., S.217.
- 51) Ebd., S.217.
- 52) Kafka, Franz: Briefe 1902-1924. Hrsg. Max Brod Frankfurt am Main 1975.S.134.
- 53) A.a.O., Kafka, Franz: In der Strafkolonie. S.218.
- 54) Ebd., S.220.
- 55) Ebd., S.219.

- 56) Ebd., S.244.
- 57) Ebd., S.245.
- 58) Ebd., S.245.
- 59) Ebd., S.217.
- 60) 尾張充典：否定詩学 カフカの散文における物語創造の意志と原理 鳥影社 2008. 41 頁。
- 61) 『聖書 新共同訳』福音社 2003 年 1 頁。
- 62) フーゴ, ホフマンスタール, フォン 檜山哲彦訳：チャンドス卿の手紙 他十篇 岩波文庫 109 頁。
- 63) ヴァーゲンバッハ, クラウス 中野孝次・高辻知義訳：若き日のカフカ 筑摩書房 1995. 106 頁。
- 64) 同書 123 頁。
- 65) A.a.O., Kafka, Franz: Briefe 1902-1924.S.337-338.
- 66) 前掲 パーヴェル, エルンスト：フランツ・カフカの生涯 165 頁。
- 67) Nietzsche, Friedrich, W:Üeber Wahrheit und Lüge im aussermoralischen Sinne. In: Nachgelassene Schriften 1870-1873 kritische Gesamtausgabe begündet von Colli, Giorgio und Mantiari, Mazzino Berlin 1973. S.371.
- 68) Kafka, Franz: Nachgelassene Schriften und Fragmente II Frankfurt am Main 2002. S.117.
- 69) Fingerhut, Karl-Heinz: Die Funktion der Tierfiguren in Werke Franz Kafkas. Offene Erzählgerüste und Figurenspele. Bonn 1969. S.51.
- 70) Kafka, Franz: Beschreibung eines Kampfes In: Nachgelassene Schriften und Fragmente I Frankfurt am Main 2002.S.91.
- 71) 前掲 保坂一夫：同時代を生きた人びとーフランツ・カフカとトーマス・マン 133 頁。
- 72) A.a.O., Der Proceß. S.284.
- 73) 仲正昌樹：「隠れたる神」の痕跡ードイツ近代の成立とヘルダリン 世界書院 2000 年 3 頁。
- 74) A.a.O., Hiebel, Helmut, Hans: Die Zeichen des Gesetzes Recht und Macht bei Franz Kafka S.186
- 75) A.a.O., Kafka, Franz: Der Proceß. S.61.
- 76) A.a.O., Herausgegeben von Schweppenhäuser, Hermann: Benjamin über Kafka Texte,

- Briefzeugnisse, Aufzeichnungen . S.18.
- 77) Ebd.,S.27.
- 78) Adorno, W, Theodor:Aufzeichnung zu Kafka.In: Liebrand, Claudia: Franz Kafka Neue Wege der Forschung 2006. S.22.
- 79) Snoek, Anke :Agamben's Joyful Kafka Finding Freedom Beyond Subordination 2012 .P.81.
- 80) Zimmermann, Hans, Dieter: Der babylonische Dolmetscher Zu Franz Kafka und Robert Walser Frankfurt am Main 1985. S.113.
- 81) A.a.O., Der Proceß. S.312.
- 82) アレマン, ベーダ 喜多尾道冬訳：カフカの『審判』 審美社 1975. 36 頁。
- 83) A.a.O.,Der Proceß. S.289.
- 84) Frank, Schirmmacher: Verteidigung der Schrift. In:Verteidigung der Schrift Kafkas >Prozeß< . Hrsg.Frank Schirmmacher. Frankfurt am Main 1987. S.148.
- 85) A.a.O., Der Proceß. S.205.
- 86) Ebd., S.218.
- 87) Ebd., S.218.
- 88) A.a.O., Nachgelassene Schriften und Fragmente II S.98.
- 89) A.a.O., Tagebücher. S.562.
- 90) Sokel,Walter, H: Von der Sprachkrise zu Franz Kafkas Poetik. In: Paulsen, Wolfgang: Österreichische Gegenwart Die moderne Literatur und ihr Verhältnis zur Tradition Bern 1980. S.50.
- 91) ブランシヨ, モーリス 山邑久仁子訳：カフカからカフカへ 書肆心水 2013. 88 頁。
- 92) A.a.O., Kafka, Franz: Beschreibung eines Kampfes S.74.
- 93) グレーツィンガ, エーリヒ, カール 清水健次訳：カフカとカバラ フランツ・カフカの作品と思想にみられるユダヤ的なもの 法政大学出版局 1995. 201 頁。
- 94) A.a.O., Sokel,Walter,H: Von der Sprachkrise zu Franz Kafkas Poetik. S.50.
- 95) 前掲 ブランシヨ, モーリス：『カフカからカフカへ』 90 頁。
- 96) A.a.O., Der Proceß. S.303.
- 97) Kafka, Franz: Ein Traum. In: Drucke zu Lebzeiten S.298.
- 98) A.a.O., Kafka, Franz:In der Strafkolonie S.215.

99) A.a.O., Kafka, Franz: Der "Brief an den Vater" S.192.